



発行所 津市新町3丁目1-1 津高等学校 同窓会事務局 TEL・FAX 059-229-7331 共立印刷株式会社

創立百二十周年記念行事開催... 2・3
政治の世界をめざして... 6
人との出会い... 7
(雑感) 喜し... 7
津高進路事情... 8
異動(住所変更など)... 9

歴史を語り



ミレニアム、そして二十世紀最後のオリンピックの年で、日本選手が大活躍して大いに盛り上がりました。

また津高創立百二十周年という誠に記念すべき意義ある年でもありました。津高同窓会として百二十周年を祝うべく各種行事を行なっていました。昨年三月には新しい同窓会名簿の発刊、本年四月には吹奏楽部と音楽部による記念演奏会、そして三重校百周年記念大会、五月には記念ゴルフ大会、八月には第四回津高同窓会美術展、十月には経ヶ峰登山を開催いたしました。それぞれの行事には役員はじめ同

窓の皆様のご協力のお蔭で成功裡に終了することができ、同窓の「絆」をより一層強めることができたと、同窓に存じます。また、同窓会基金の充足と母校教育施設充実のための記念募金には格別のご協力を賜り、有難く厚くお礼申し上げます。記念すべき二十一世紀もあつた

同窓会長 岡村 初博 (昭和15年卒)

ご挨拶

学校長 鈴山 雅子 (昭和35年卒)

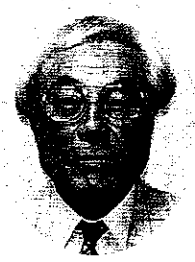


同窓会員の皆様には、いよいよご健勝にて活躍のごとをお喜び申し上げます。

この四月、本校校長を拝命いたしました。前校長同様に、鞭撻くださいますようよろしくお願い申し上げます。昭和三十五年本校を卒業し、教員之道を志し歩んで参りましたが、その後原教育委員会事務局、総合教育センター等々に転じ、高校教育現場を離れておりました。このたびは再び母校に奉職できまことは、まことに光栄に存じますとともに、職責の重大さを痛感しているところであります。着任以来半年余、これまで

に三重校創立百周年記念大会、百二十周年を記念して開催された津高同窓会総会・パーティー、東京、九州、名古屋、松阪陳川などの各同窓会に出席させていただきましたが、いずれも和やかな雰囲気の中、包みれ盛会でありました。皆様方の母校へ寄せた熱い思いや同窓の絆の強さを美観するとともに、暖かい励ましのメッセージをいただき感謝した次第です。さて、西暦二〇〇〇年という大きな節目の年に本校は創立百二十周年を迎えました。同窓会では昨年来の周到な計画のもと多彩な記念事業を実施され、成功裏に終了されましたこと、まことに喜ばしい限りでございます。その際、本校教育の振興充実のために多額の芳志を賜ると伺い同窓会の皆様のご厚情に深く感謝の意を表する次第であります。学校といたしましては、記念の小冊子「120

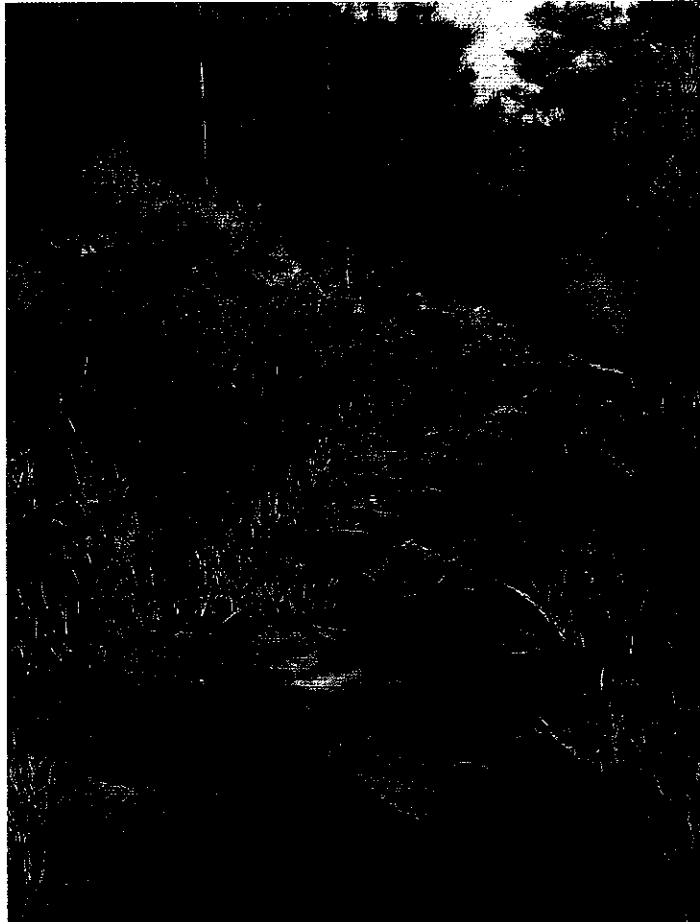
ブルの後遺症から脱却できず、各分野で構造改革を迫られており、教育改革も同様、待たなければなりません。幸い津高高等学校は校長の鈴山雅子先生を中心として積極的に、新時代を担うことのできる人間教育に熱意を燃やしておられ、誠に心強く感ずる昨今であります。IT・IT等を導入して国際化対応できる人材育成に期待すること大であります。最後に、同窓の皆様のご健康と発展を祈念し、母校へのより篤い愛情とご指導を期待してご挨拶いたします。



あした 明日に向けて 長谷川 寛 (昭和26年卒)

今年の夏はことのほか猛暑が続き、私が住む埼玉県では、九月二日に熊谷市で三九・七度を記録した。その年々あちこちのクーラーがフル回転し、都会では室外機から吹き出る熱風が歩道を歩く人びとを容赦なく襲う。街角のゴミ集積所では、カラスの群れがビニール袋を食いちぎり、辺りに臭いを放っている。そして強烈な紫外線から身を守るために、夏でも長袖を着、帽子を深く被って歩く人びとの姿が増える。なかには手袋をはめて自転車や車に乗ったり...と、これも二十世紀最後の夏の日本の風景のひとつ。

絵 タイトル・書



「創立百年記念讃歌」 「東紀州熊野古道」

千草光洞 (昭和23年卒) 鈴木一生 (昭和26年卒)

「創立百年記念讃歌」 「東紀州熊野古道」

「創立百年記念讃歌」 「東紀州熊野古道」

「創立百年記念讃歌」 「東紀州熊野古道」

「創立百年記念讃歌」 「東紀州熊野古道」

「創立百年記念讃歌」 「東紀州熊野古道」

(編集コーディネーター)

創立120周年記念行事開催!!

我が母校津高は、明治十三年一月津中学校として創立以来、本年で百二十年を迎えました。同窓会では、これを機会に各種イベントに取り組み、昨年度の事業で成功を収めることができました。昨年発行の同窓会名簿を皮切りに、音楽部・吹奏楽部合同の記念演奏会、陳川・三重校・津高の校歌等を収録したCDの制作、三重校部会総会、記念ゴルフ大会、同窓会美術展、この美術展には現役の生徒諸君も大作を出品してくれました。記念旅行には

「経ヶ峰・初登山」

伊藤 喜久男（昭和45年卒）

十月十五日朝、集合場所へ向かう車中、曽根橋を越えたところから、経ヶ峰を望むと麓に霞がかたなびき、絵に描いたような景色です。

「きれいに霞がかかっている」と後部座席から能弁の先輩O女史。「あれはあの下で大勢の人がタバコを吸っている煙」と助手席から多弁の同級生T君。三重県立津高等学校創立百二十年記念の経ヶ峰登山、私にとって初めての経ヶ峰登山は、こんなやりとりで始まりました。

T君の執拗なまでの誘いで事前申し込み無しで飛び込み参加。受付を済ませ、午前八時十分昭和三十六年卒の先輩一行の後に従うように集合場所の草生公民館駐車場を出発。少々曇ってはいましたが

南アフリカとカナダをそれぞれ訪れました。また、秋の彩りも感じられる十月には、心のふるさと経ヶ峰登山があり、当日は中日新聞の「好意でヘリコプターからの航空写真の撮影も行われ、多数の同窓生が楽しい一日を過ごしました。これらの諸行事と共にこれからの学校教育の充実のため、本年一月以来募金活動を展開しております。百二十年事業完了の趣旨をご理解いただき、同窓生の皆様にご協力を御願ひ申し上げます。

が、秋たけなわののどかな空気の中心を気持ちよく歩を進めました。途中、道ばたに咲く草花を「これはアザミ、あれは○○、それは△△」と興味深いO女史の鑑賞、相づちを入れるT君のやり取りを聞きながら快調に頂上を目指すと数十分。少し登り坂がきつくな

り、ここで図らずも少々息切れ。聞けばこの先に駐車場があり、その先から本格的な登山道とのこと。それならそこで車で行けば良かったなと思いつつも、な

お歩を緩めず進む。相変わらず元気な能弁のO女史と多弁のT君の会話は続き、時々私も相づち。ようやく駐車場ついた頃にはその相づちも途絶えがちになってしま

かったのは、同行の二人の励ましと、絶妙なおしゃべりのお陰と感謝。このあと続々と参加者が到着しましたが、殆どが先輩の皆さんで中には若田先生のお姿もあり、そのお元気に私は脱帽でした。お昼には中日新聞のヘリが撮影と祝福に上空を旋回し、参加者一同これに手を振って応えました。

は急峻な山道で、少し進んだところで元気が二人に勧められ耐えきれずに休憩。こんなにしんどいのなら来なければ良かったと多少後悔しましたが、ここまで来てはもう遅く、約十分休憩後、再び頂上へ向かって重たくなった足を引き

ず息を切らせて歩いただけ、あとの二人は快調なおしゃべり。こんな状況が続き、残りの急斜面を登り切ったところでやっと頂上に到着。眼下に広がる大パノラマは、途中の苦しさをすっかり忘れさせる感動でした。あちこちから昇る野

焼きの煙は、多分朝に見た霞の素か、いずれにしても風情溢れるものでした。到着が十時三十分で所要時間一時間二十分の登山でしたが、それほど時間を感



中日新聞社提供



本校百二十年を記念して制作いたしましたCD『津高等学校・校歌集』はお聴きいただきありがとうございました。事務局の方より、たくさんのお問い合わせがあったことを聞き、大変嬉しく思っております。

この話を私たちがうかがったのは昨年一月のことでした。同窓会事務局より、記念事業の一環として「校歌CD」の制作について協力依頼があり、阿（音楽部 吹奏楽部）顧問を中心に、実行委員会を組んで話を進めていくことになりました。内容につきましては、

創立百二十年記念 津高同窓会美術展

大浦 峰 郎（昭和43年卒）

八月九日十三日に、三重県総合文化センターのギャラリーで開催された同窓会、企画当初から参加させていたが、絵画71点（うち在校生15点）彫刻5点（うち在校生7点）総数76点が県内外から出品され、入場者数は一、四四八人と、大盛況のうちに幕を閉じました。

五年前と比べて、出品者の内容に少し変化が見られたように思われます。卒業年度の間置けにおいて、出品者が少ないように感じました。仕事等、公私共に多忙ではあると思いますが、五年先には積極的に参加した方がよいと願っています。

展示内容については、かなり多くの方から、「充実したすばらしい美術展ですね」とおほめの言葉をいただきました。小生は今回

私事にて出品を断念しましたが自分のこのようにうれしい気持ちでいっぱいでした。会場の都合で同窓会総会の日時（二週間ずれてしまったにもかかわらず、会場のおちこちで、同窓生の輪ができて、親しく旧交を暖める場を拝見し、津高等学校の伝統をかいまみる思いがいたしました。

出品者の中には東京都美術館等に出品していらっしゃる方も何人かあり、たかが同窓会展ではなく、美術展としての評価を高めてくださいました。また一方では完全にアマチュアとして、人生を創作活動の場とし、ささやかに自分だけの詩を、歌いあげている作品も多く、このことが会場にやさしさや潤いをもたらした。相互の共鳴から、より質の高い美術展となったように感じています。

CD製作にあたって

玉崎 秀 人（昭和55年卒）

それぞれの部がOBを中心に、それぞれの持ち味を出すことで合意し、同じ曲を、吹奏楽部の演奏と合唱の二種類で録音することにしました。その後、資料の収集、採譜、編曲の依頼、演奏者の招集、録音業者の選定へと作業は進み、音楽部は、市内の合唱団で活躍しているOBを中心に、八月末に本校音楽室に於いて録音会を開きました。指揮は伴剛一氏、ピアノは北後知尋氏にお願いしました。吹奏楽の方は秋になってから本校体育館に於いて「津校吹奏楽団」として活動しているOBが集まった録音でした。その日の指揮は

伊東玲氏でした。さて肝心のCDの出来につきましては、皆様のお声をお聞かせいただきより他にございませぬが、私たちがしましては、記念に残るものとして精一杯努力したつもりです。最後になりましたが、このCD制作に、ご協力いただきました皆様には、心より御礼申し上げます。特に、伊東功・伴剛一の両氏には、編曲という大変な仕事をお願いいただきまして、心より感謝いたします。

「追記（お詫びと訂正）」
CDをお聴きいただいた皆様より、次のような指摘をいただきました。ご教示をお願いします。

- * 津高等学校校歌・作曲者名 「喜田 治男」氏
- * 津中学校校歌・作曲者名 「弘田龍太郎」氏



その他、歌詞の読み方等につきましても指摘をいただいております。お返事の点がございましたら、ご教示をお願いします。

津高創立百二十周年を盛大に祝う

教頭 中 条 政 紀 (昭和38年卒)

津高創立百二十周年記念式典が平成十二年十月二十八日(土)三重県総合文化センター大ホールに於いて、津高発展に尽力された教育委員会・各高等学校長・旧職員はじめ教育関係者、同窓会、保護者、全教職員・生徒など約千七百名の出席のもと、厳粛かつ格式高く盛大に挙行されました。

思えば、津高百二十年の歴史は明治・大正・昭和・平成という大きな時代の容姿とともにあります。自主・自律の教育方針はもとより自由な校風そのものがまさに重い伝統となつて培われ、有為な人材を輩出しつづけてきました。

式典はファンファーレで始まり、鈴山校長の式辞についで、教育委員会中嶋生涯学習課長・土庄OBのスイス・チューリッヒ大学

PTA会長・富島津高同窓会副会長・生徒代表より多くの祝辞と挨拶をいただきました。その後、津高放送部によるスライド上映があり、旧制津高・県立津高女の校舎や学校生活など津高の変遷の紹介がありました。また音楽部を中心とする生徒諸君が、津中校歌、県立津高高等学校校歌、津高校歌を母校の伝統に思いをはせて合唱しました。

医学部主任教授の米川泰弘先生に「二十世紀に生きる我々のメッセージ」と題する講演をいただきました。脳神経科学の発展の歴史やご自身が若い頃に感銘を受けた詩を紹介しながら、科学にたずさわるには「専門だけでは不十分、幅広い知識・教養に裏づけられた人間性、総合的に広くものをみるバランスのとれた考え方が大切」と語りかけられました。先生の半生にわたる人生観を語られ生徒への指針とされました。

式典出席の先輩方も当時を懐かしむようにスライドを見入り、在校生と一緒に校歌を歌っておられました。津高の伝統を二十一世紀に伝え、更なる飛躍をめざそうという雰囲気が感じられました。

式典後、記念講演に移り、津高OBのスイス・チューリッヒ大学

午後、本校邦楽部の演奏、茶道部のお茶会などが催され、同窓会関係者はじめ多くの方に参加いただきました。更に、十五時三十分より津高創立百二十周年記念祝賀会が三重県総合文化センターレセプションルームで約百七十名ほどの参加者を得て盛大に催されました。

また米川先生は講演後、医・薬・生物系を志す生徒の座談会にもご出席いただき、先生の津高に対する熱い思いが生徒に伝わる中、生徒は熱心に質問したり、先生のお話に聴き入りました。

津高百二十年の歴史は明治・大正・昭和・平成という大きな時代の容姿とともにあります。自主・自律の教育方針はもとより自由な校風そのものがまさに重い伝統となつて培われ、有為な人材を輩出しつづけてきました。

大自然の南アフリカの旅

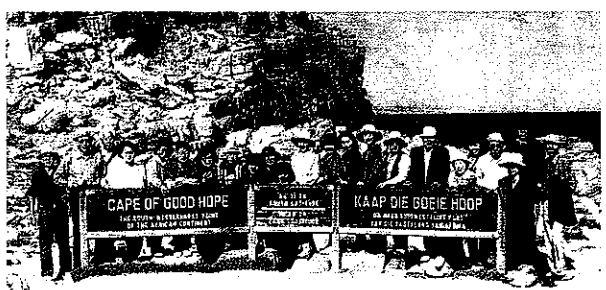
岩田直衛 (昭和14年卒)

1 大自然の南アフリカへ出発
津高百二十周年記念行事として計画された南アフリカ八日間の旅(8/20~8/27)に参加したJTBの添乗員の村山さんを含め

23名が名古屋空港を飛び立った。香港で乗継ぎ、ヨハネスブルグ、さらにウィクトリアフォールズ空港まで十八時間のフライトである。時差は七時間。喜望峰と聞いただけで胸がおどる。

2 雷鳴のようなウィクトリア滝
滝に近い空港はジンバブエにある。ジンバブエとは「石の家」の意で、一八六八年巨大な右造建築群がモノタパ王国の都ジンバブエから発見された。ホテル「ザ・キングダム」に到着するや、ザンベジ川のサンセットクルーズに出かける。快晴のサバンナが青色に染まる地平線。そこに立つキラリンのシルエット。河岸に家やワニがいて、日が暮れると現地人の舞踏を鑑賞する。

3 チョベ国立公園でのサファリ
八月二十三日は、ボツワナ国のチョベロッジに宿泊して、陸上からオープンカーでサバンナを、また水上をクルーズでサファリを楽しむ。早朝のゲームサファリは寒い。南半球は早春なのだ。乾期で毎日快晴。キリン・カバ・ワニや象の一家が子象をつれて渡河している。象が円陣をつくって子象を守っている。ライオンだ。ライオンが吼えたと仲間が集って来る。車の前をライオンが横切る。船上



轟く水煙」といわれるように霧雨のように水煙がまき上がって滝つぼは見えない。滝の幅17km、高さ最大110m、ザンベジ川にかかる巨大な滝は一目では全体像が見えない。ジンバブエ側の2kmの遊歩道を散策すると、今度は国境を越えてザンビア側からの見学である。一部の人はヘリコプターで空から見学して満足気であった。

4 待望の希望峰に感激
八月二十四日、夕方ケープタウンに到着。丘に登ると夜景が美しい。翌二十五日はよいよ喜望峰である。バスでケープ半島を南下する。途中船でアザラシのいるドイカー島やペンギンの生息するホルターズビーチや植物園に立ち寄る。荒涼とした丘をアップダウンして行く。途中の丘の上に、ディアスとガマの像が立つ。間もなく喜望峰に到着。はじめ「風の岬」と呼ばれたのがち「喜望峰」と改称された歴史がよみがえる。アフリカの西南端だ。最南端のアグレス岬が遠望できる。参加者全員感激している。海はあくまでも群青に光輝く。ケープルでケープポイントへ。ここで大西洋とインド洋の左右に分けられる。帰路ケープタウンの背後にテーブルマウンテンが夕日に映えて輝いていた。



津高百二十周年記念演奏会に参加して

杉田孝子 (昭和30年卒)

あれは三月中旬のこと、一通の封書を受け取りました。津校の音楽部からでした。「津高音楽部」なんとつかしい文字、なつかしい響きでしょう。

内容は「津高百二十周年記念事業」の一環として、現役部員とOBとの合同演奏を実現したいとの主旨でした。奇しくも昨年30年卒の同窓会で、当時音楽部だった友とお会いし「卒業以来、大卒で、職場で、地域で、コーラスを続けて来たけれど、やはり津高の音楽部がなつかしい。今一度集って歌えたら、どんなに楽しいことかしら。是非実現したいもの……。」と話が盛り上がりつつあったこともあり、私は何の迷いもなく出席の返事を出しました。

三月二十五日、第一回目の練習は「ロッキー・マウンテン」にてカナディア

習が津高音楽室でありました。集まったメンバーはというと先輩の奥田様、家合様のお二人、次が私で、あとはお若い方が多く、何か場違いなところへ来てしまったのでは……と不安になりましたが、小林先生、玉崎先生はじめ部員の皆様のあたたかいおもてなしで、かろうじて、楽しい練習をする事が出来ました。前夜のゲネプロも無事に終えて四月三日本番。私たちOBは第一部の最後に現役の方と共に津中学校歌、県立津高女校歌、津高校歌を歌い、会場の皆様にも一緒に歌っていただきました。

第二部の第三ステージがいよいよ私たちのOBの出番です。「さるさるの四季」「大地讃頌」いずれも今までに何度となく歌った曲ばかりです。練習の時、小林先生がおっしゃった「この鳥肌立つような声のままとまりは一体何だろう……。」と

三重県下はもとより、遠くは東京・大阪・長野・京都・名古屋・兵庫……と各地から駆けつけた方々が、はじめて合わせた声がかんにも一つにまとまらなう。これ

折にふれてきれいな文字でお手紙をいただき、私も又お返事を書いていきます。娘のような孫のような若いお友達との交流は私をすっかり返らせてくれます。

今回の企画をして下さった先生方はじめ部員のみならず心からお礼を申し上げ、母校のますますの発展をお祈りいたしております。

原の一角アサカスカ水河に直接触れ、一万年前の水河の水を味わったのは貴重な体験であった。

カナダ旅行に参加して

大西浩 (昭和26年卒)

津高創立百二十周年を記念して企画された「ナイアガラ瀑布と列車で行くカナディア」に同窓会メンバーとして参加した。八月二十四日名古屋空港出発。バンクーバー経由トロント着、ナイ

イアガラ瀑布を展望して、トロントからカルガリー経由バンフに向かい、レイクルイス、コロンビア大氷原などを観光した後、バンフからカナダ旅最盛道「ロッキー・マウンテン」にてカナディア

く、皆何処かで何かの関係があり、果ては遠い親戚であることが分かったりして、人と人の繋がりの不思議さ、広いよつで世間は狭いことを実感した。

最後に食事の話をする。カナダ料理の定番がどのようなものか知らないが、一般に量が多く、大味で、日本人の食感とは少し違つたように感じられた。特に、カムループスのホテルでの歓迎夕食会「サイモン」のソテーにメープルシロップのソースをかけたものが出されたのには、さすが健康家を鳴るメンバー諸君も辟易し、同じ鮭なら塩ジャケでお茶漬けが食べたというのが偽らぬ実感であった。



二つの価値観に分断された

私の津中時代

高藤 昭（昭和22年卒）



私の津中時代は終戦を境にしてその前後でまったく逆の価値観に支配される二つの希有の時期であった。

入学は太平洋戦争勃発の翌年で、敗戦によるその終結を迎えたのは四年のときであった。二年までは通常の授業を受けたが、弓道部に入ってから矢が命中し始めた三年に、忘れもしない「三菱重工業名古屋航空機製作所四日市工場

に学徒動員。寮生活となり、かの零戦、一式陸攻、雷電などの製造に従事した（私は溶接士）。なにしろ軍国一色の時代で、天皇、現人神、忠君愛國、奉國、致滅私奉公などのキーワードで示される思想——「日の丸」「君が代」はそのシンボル——以外の思想を知らなかった。いまから考えれば、暗黒の抑圧の時代であったが、当時は疑うことはなかった。

しかし、なにぶん十四歳前後の子供のころ、慢性的空腹と労働の毎日の鬱積がある夜、爆発した。一クラスの生徒が投石で寮の一棟のガラスを全部割る事件が突発したのである。軍部からみれば、子供とはいえず、叛乱である。重大事

として迎えた戦後の大転換である。しばらくは、わけがわからなかった。一番とまどったのは先生方であったと思う。いままでも生徒に叩き込んだ精神教育が根底から覆り、その立場と権威は失われた。いまだ事態が分からず、敵討ちをテーマとした題材をあえて選

たものでした。「チョット。その津中の子」と言われれば、ドキッとしたものでした。私達は「ホルモン婆さん」と呼んでいました。しかし、叱られるはしたものの、先生には、どこか親近感も抱いていました。先生のお人柄の然らしめるところでしょうね。

津中は津市の西部。県立は岩田橋を渡って津市の南部。岩田橋から津新町の間の道路は両校の生徒にとって、登下校のメイン・ストリートでした。よく、すれ違ったものでした。当時は歩道と車道の区別はなかったため、余計に親しみを感ずいたのでしょうね。

両方とも家を出る時間帯が同じなのか、特定の子とは特によくすれ違いました。「アッ。あの子また来た。」と思つと嬉しくなりました。今、思うと笑顔の一つはうらみは捧げるべきだった、と残念でなりません。〇〇君と〇〇さんと我々の間で噂になった子もいました。しかし、軍靴の響き高まり行く、時世、それ以上には進展しなかつたようです。

思い出は此れ位にして、現実の詩

麗しの花 三重桜

中川 勝太郎（昭和16年卒）



男女七歳にして席を同じはず、誰が言ったのか、或は、中国の古典から出た言葉か分かりませんが、私達の津中時代は、そんな時代でした。しかし、ダメと言われれば、かえって興味をそそられるのが人間の本性。県立の子は私達の話題の中心的存在でした。

生徒ではありませんが、最も話題に上がったのは草川先生でした。当時は既に先生の職を辞された先生のOB（正しくはOGか）でありながら、私達もよく此れ



三重県立津高女学校。私達は略称して「県立」と言っています。

んだ漢文の先生もおられた。早々に現れた「天皇制廃止」論には私さえ不安を感じた。

占領軍の持ち込んだ自由、民主個人の尊厳などは、軍国思想の対極にあるもので、われわれにはまったく未知のものであった。しかしこの推進には「軍刀」の脅しはなかった。国民はいつしかその価値を知り、いままでも言っていた思想の誤りを悟るとともに、それを強制した軍や政府に怒りを向けた。皮肉にも敗戦が自由をもたらしてくれたのである。服装にしても、津中時代、はじめてゲートルなしで歩くことに、これだけの解放された爽快感は経験した者だけが知る。そしてこの価値観の大転換も卒業の頃にはスムーズに完了していたようである。以て五〇年平和が続いている。

ところで、戦争中、津中風の集団登校というのがあった。登校時間に思い思いに家を出た生徒は途中

私の津中時代の友達の大抵方には県立の子が多い。津中と県立には、どこか一脈通じるものがあるんでしょね。私達の同窓会での或る友人との会話。

「うちの案内が言っただけだね。君の奥さん、三重校と違つか？」
「うん、そだよ。君の奥さんも三重校らしいね。うちのが言っていた。」
「うん、そだよ。しかしね君、三重校って恐いことないか？」
その時の彼の返事。身をくねらせての彼のジェスチャー。いまだに脳裏に浮かぶのです。

「こわ〜いこわい〜。」
そして、二人でワッパッパッパッパッ、笑い転げたものでした。この冗談話は、津中・三重校カプトル同士でないと通じないでしょうね。

どこの家庭でも、三重校は良妻賢母のようです。三重校の家庭は奥さんがしっかりしているから、夫婦円満、家庭安泰なんですね。

衷心よりの感謝を込めて、三重校に乾杯!!

長谷川昇君の逝去を悼む

同窓会常任幹事 栢原 傳（昭和12年卒）

東京同窓会の牽引者、日本の自動車産業を支える有力な部品メーカー、三恵技研の創設者、経営者の長谷川昇君が、この世を去った。同期生で仲良しの私は、机を並べて学習し、柔道部で汗を流しあ

副会長飯田宏君(昭和49年卒)を悼んで

三重県議会議員 舟橋 裕幸（昭和49年卒）

九月二十四日早朝に電話が鳴った。「飯田君が亡くなった。」言葉がでなかった。しかし、通夜に参列し、現実を認めざるを得なかつた。

母校津中（津高校）は勿論、幼き日の思い出に詰まった村主小学校に長谷川文庫を贈ったり、彼の善行は多い。三恵技研安濃工場の建設もその一つ。また、津高校同窓会東京支部役員としての活躍、津高校火災の際の再建資金の拠出も、母校愛の現れである。

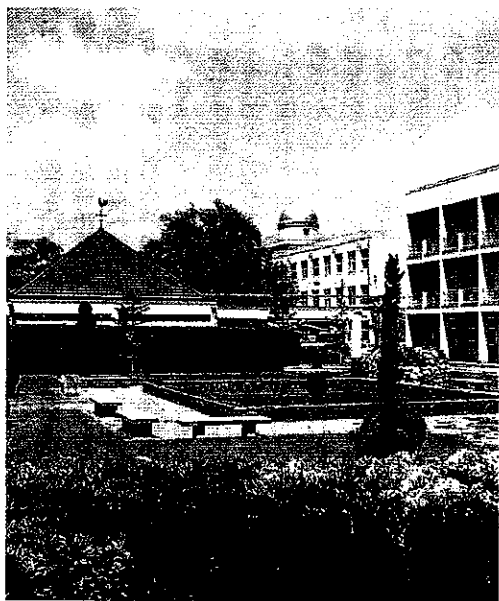
六年前、脳梗塞で倒れ、賢夫人の手厚い看護で再起を期していたのに残念にも逝去。冥福を祈る。

えてくれた飯田君。今は天国に召され、私たちが見守ってこれているのかと思つと、はかなく本当に悲しい思いで一杯だ。

残された私たちは、君の愛した遺族、会社として同窓会を大切に、君の分まで現世で精一杯頑張りたい。

飯田君やすらかに眼を、冥福を祈る。

校舎



藤田 伸也（昭和52年卒）

た。日本史の教科書に奈良制の現存例として本校付近の空中写真が載っており、なるほどとも田んぼでは温気が高いのも当然かと納得したものでした。教室の中の机と椅子は今と同じく一休型だったが、一年生のときは古い木製で、重く扱いにくいその机を向き合わせて放課後しばしば紙麻雀をしていくことが懐かしい。教室での勉強よりも遊んだことの方が鮮明で、厚紙で作った麻雀牌の音がさした感触は忘れられない。当時の先生は遊び呆けている我々を見て「程々にして帰れなさい。」と告げるので、頭ごなしに怒ることもなかつた。今、考えるのときな学校生活で、宿題が他校と比べて少なかつたのも美点といえよう。

休み時間は短時間で決着が付くトランプをよくやっていたが、二年生に

たが、中は最近改装されてずいぶんきれいなになっていた。

露で廊下は水をこぼしたようだった。

校舎は所詮、入れ物であり、自身の教育すなわち教師と生徒の質が最重要なのは改めて述べるまでもない。けれども、もし津高の校舎の配置や建物に建築としての魅力が備わっていれば、懐かしい高校生活の記憶に誇りがやれといった感情が加わっていたように思う。

モニユメンタルな場所や建物が存在しない町である津の名所となるような雰囲気ある建築物に津高校がなる日を夢見るが、その実現は孫の代であろうか。

激動の百年

生き続ける女学校教育

三重桜部会長 佐々木 かよ（大正5年卒）



明治から今日迄の百年は、天災
戦災そして民主化へと歴史に残る
激動の時代でした。

しかし様々な苦難を克服、今日
明るく生活できるのは、かつての
女学校教育が脈々と生き続けて来
たからだに感慨深いものがありま
す。

今、平成の改革時代、私達は高
齢ですが健康に留意しつつ二十一
世紀へ向け前向きに生きてみたい
ものです。

私達は「良妻賢母」を旨とし、
「質実剛健、気風、自立、勉学、
忍耐」を目標とし、異下唯一の高女
に学ぶ自覚をもって努力するよう
かなり厳しい指導を受けました。

毎月曜の朝会では「心の掟」を
声高らかに唱え、毎日、修養日誌
を毛筆で書き一日を省みしました。
学習は先生方の熱心な指導で
楽しい毎日でした。毎月一回、往
復十数キロの遠足、年一回香長洲
へ全員参加し、旅行も朝熊山
経ヶ峰、高野山、比叡山等々へ登
り、その喜びは格別でした。又体
験学習も多く春は製糸、夏は種十
水泳、浴衣の早織り、これを活か

三重桜同窓会の歴史

三重桜百周年記念実行委員長

伊藤 ミヤコ（昭和15年卒）



三重桜部会が、県立津高女創立
百年記念大会を開催しましたとこ
ろ、四百余名の参加をいたがま
実行委員一同厚く御礼申し上げます。
今回は三重桜部会の歩みを振
り返ってみたいと思います。

創立時代からの木造校舎はあり
ませんが、花崗岩の正門柱だけが
使われています。その後、門を入
って西側に「三重県立津高女学校
跡」という石碑を同窓会が建立し
ました。またその折、運動場南側
にあった銀杏の大木も伐採、大き
な根元を薄く切り磨いて「樹立」
とし、現在は津高女校に飾られて
います。種子は実生とし、苗木を
津高女校正門横に移植、見上げる
程に成長しています。津高へお出
掛けの際には、ご覧になりお喜び下
さい。

昭和三十五年津高同窓会の確立
により、三重桜部会はその一部と
なり、竹島先生が部会長として長
年お世話下さり、三十七年大火の
募金にも協力、その後、佐々
木各会長が部会の育成に「尽力さ
れました。

同窓会名簿は昭和に入ってから作
製され、また、講堂建設が寄付金
額も記されています。

また、昔の寄宿舎のあたりに同
窓会所有の土地があり、高畑、竹
島岡先生のご尽力により、県八買

三重桜部会では毎年総会を県下
各地で開催し、それぞれの土地の
会員の皆様にお世話になりました。
特に九十・百周年記念大会は大盛
会で、在学中使用した教材の展示

三重桜百周年記念大会

奥山 美登子（昭和19年卒）



二〇〇〇年四月二十三日、これ
は母校創立百二十周年記念大会と
いふ采ある日と共に、長年続け
て来た三重桜同窓会総会の最後と
なる日でもありました。

この日に向けて二年前から準備
に入り、仕事は少しずつ進めてお
りましたが、昨年暮れに事務局長
が急逝され、続いて幹事の三人が
入院という事態となり、ここに來
て伝統ある三重桜が首を立てて崩
れるのでは……という不安にから
れるのでは……という不安にから

れました。

しかし嘆き悲しんでいる時間は
ありません。度々幹事会を開き、
今までの決定事項を確認し、手分
けをして無我夢中で仕事を進めま
した。電話を掛け、車で走り回り、
会場設営を依頼した都ホテルには
何度も飛び込みました。

その間に各学年代表さんには、
記念品や大会資料の注文の取りま
とめ等をお願いし、大変なお世話
をありがとうございました。

例年は二百人程の出席ですが、
今回は記念大会であり、最後の総
会といつことで、予想の三百人は
を越えました。

重県立津高等女学校創立百周年記念大会



は昔を思い出していただきました。皆
様に供出していただいたその資料
は、今後津高に参考資料として保
管されます。

久居等の支部があり、各地で活躍
していただいています。総会がな
くなりましたので、今後、三重桜
の連絡等は、津高同窓会本部まで
ご連絡下さるようお願いいたします。

共学事始めの日々

遠藤 寛子（昭和24年卒）



同窓会の会合にはついご無沙汰
をしていますが、でも母校の事は
いつもなつかしく思い出していま
す。

津高卒業後五十年、ジュニアの
ための創作と評論の仕事をしてい
ます。私達の高校時代は新学制の
草創期でした。進駐軍の教育政策
は地方によって違いがあったよう
で三重県はずい分きびしかったと
思います。新制高校の二年になっ
たとたん、旧津中と統合の発表、
せつかく戦災を免れた津高女の校
舎は新制中学に明け渡せとのこと。
かくて昭和二十三年五月、てん
やわんやの中、私達は旧津中が仮
住まい中の久居の33連隊の兵営跡
に引っ越しました。校庭での対面
式の事はよく覚えていませんが、
強烈に記憶に残っているのは、翌
日からの津中先輩の母校訪問です。

昼休み、生徒集会というので校庭
に集まると、号令台に立った青年
が「後輩諸君、自分は津中何回卒
業の何某である」と演説を始めま
した。要するに「学校が統合され
ても津中の伝統を忘れるな」とい
う事です。こいつは先輩の訪問
は連日つき、中には「女子とい
緒になっても、柔弱になつてはな
らんぞ」と私達女子を目の前に
おいて演説する方もありました。
（失礼ね）とは思っても、温良貞
淑の教育を受けた私達は黙って聞
いていました。

津中先輩達の心配をよそに、私
達の共学は次第に板についていき
ました。積極的幾人かは早速カッ
ブルを作って登下校も一緒です。
学校行事やクラブ活動も、また
男子生徒が主導ながら仲よくなり
ました。修学旅行の実施について
は高校時代の思い出にせむという
推進派と、このインフレ下、父母
に負担はかけられぬという中止派
が生徒集会で大討論、結局全員が
投票し、中止票が多数を占め、学
校もこの結果を汲んで実施はされ
ませんでした。

成人の日、私の所属する国文研
究会は学校の宿直室で、新年会を
開きました。みかんとおせんべい
で百人一首等、さざやかながら結
構盛り上がりしました。顧問の先生
が寒い中、終始お付き合ひ下さつ
たのは有難い事でした。
ところで幼稚園時代松阪で育つ
た私は、この統合のおかげで幼な
友達の数人かと再会しました。松
阪の老舗「蔵庄」の竹内清一郎君
もその一人でした。旧学制の松阪
には女学校はあっても中学がなく
中学進学者は津中か山田中に進学
したので、竹内君も津中に入學し
ていました。でも再会も東の間、
新制度はさらさらきびしく、松阪出
身者はまもなく松阪の新設校に転
校してしまいました。ところが先日
私の記事を見たからと、五十年ぶ
りに竹内氏から連絡がありました。
津高での再会があったので記憶
して下さったのでしょうか。
いろいろあった共学時代の頃。す
べては得がたい体験でした。
津高同窓会がますますの発展
をお祈り致します。

い上げ会は始まりました。
会長挨拶に続き津高同窓会会長、
津市長、恩師、校長の方々から
お祝いの言葉を寄せましたが
恩師のお話には懐かしい学校生活
を思い出させて頂き、また津高の
初代女性校長となられた鈴山雅子
先生に対し、会員一同は我が事の
ように誇らしく思い、万雷の拍手
をお送りしました。先生のお話に
よりますと、在校生の皆さんが真
面目に活躍しておられる由。誠に
嬉しく頼もしく思ったことでした。
祝宴は藤貴流家元の「祝賀の舞」
で始まり、同窓会副会長の発声で
乾杯を行い懇親会に入りました。
久々に目にかかる恩師のお席
は千客万来。ゆづりお昼を召し
上げる時間が無かったのではと少々
厚くお礼申し上げます。

今回の記念大会に当り、津高同
窓会事務局、担当の先生、三重桜
学年代表及び委員の方々には、一
方ならぬお世話になりました有り
難うございました。ここに改めて
厚くお礼申し上げます。

思い出雑感

坂本成彦(昭和33年卒)



昭和十五年(一九四〇)生まれで、姉二人第一の四人兄弟。三重県津市で小・中・高校を過ごし、大学以降は関西に居るので人生のおよそ三分の一は津、残りは関西圏に暮らしていることになりませ...

昭和十五年(一九四〇)生まれで、姉二人第一の四人兄弟。三重県津市で小・中・高校を過ごし、大学以降は関西に居るので人生のおよそ三分の一は津、残りは関西圏に暮らしていることになりませ...

政治の世界をめざして

高橋千秋(昭和50年卒)



集団のようには見え、毎日が楽しい日々の連続でした。

このランタイムズ、まさに知的だが人と違つたことをという発想をもとに、屋上で毎日弁当を食べ、たわもないことを繰り返すという時に時を費やしたのです。

私が津高へ入ったのは学校辞制度が施行される二年前の昭和四十七年でした。当時の津高はまさに自由な、まるで一気に大学へ入ったのではと錯覚してしまつたような雰囲気がありました。

しかし、私は田舎の中学からようやく合格して入ったこの高校の同級生を見て、まして先輩を見て、経験したことのない都会の知的な雰囲気を感じ、何か人とは違つたものを探して求めている

防具はフェンシングの防具に似たものでしたが、徐々に現在の剣道に戻されて来ました。四日市商業高校と津高校が県では一、二位を争うライバル校でしたが、東海大会ではいつも負けるので、全国大会出場への機会はありませんでした。

えで行く経験が、その後の社会生活での大きな支えとなり、苦しい時のバネになりました。また学部異なる先輩、同輩との交わりに刺激と影響を受けたことは少なからずありました。

津高創立百二十周年

募金寄付者(芳名)(敬称略)

創立百二十周年を機にコンピューター化に伴う学校施設拡充と、同窓会基金の充実を図るため、本年一月より記念募金を開始いたしました。早速ご趣意を、ご理解いただき、多数の同窓の皆様より貴

重なる浄財を寄付いただきました。ここに「寄付いただきました方々のお名前を掲載させていただきます、お礼申し上げます。なお、本名簿は十月十日現在のものです。

- 創設者 津高英、中根婦美子、高志、愛
昭和四年卒 鈴木英、中根婦美子、高志、愛
昭和五年卒 中村たつ子、渡辺登志子、小川静子、荒川サワ
昭和七年卒 西岡志子
昭和八年卒 岡安きよ
昭和十年卒 赤塚知子、田中千代子、坂井福子、山下元江
昭和十一年卒 後藤美穂子、山路きよ、高林隆子、湯美穂代、菊岡静子、大西千鶴、昭和十一年卒一
昭和十二年卒 中西順子、吉村貞子、青木千鶴、大森みな
昭和十三年卒 井崎里美、昭和十三年卒菊組一同、市川たか
昭和十四年卒 羽田八洲子、岸田操、津村みち、細野久枝、芦澤楠子、江崎節子、伊藤フク、草川千代子、鬼頭政子、渡辺ちよ、野田美代子、新堂愛子、宮本夏子、平野日出子、三原錦子、栗田信子、井口とみ子、吉田伊都子、小川光子、大島寛子、藤田久美、中井貞子、本多寛代、徳田静子、馬場良子、谷崎佳子、伊藤行子、高北雅子、小林千代、増村さかへ、岩田愛子
昭和十五年卒 安井美穂子、内藤ウタ子、坂倉妙子、丹羽雅子、川村知子、草川君子、松田あけ、田口華子、速水清子、伊藤ミヤコ、南純子、水口田鶴子、中廣あけ子、花實昌子、笠原峰子、山本澄、町谷石栄
昭和十六年卒 青木みか、藤堂恵美子、中山隆子、網谷翠、中島寿枝、林美津子
昭和十七年卒 東山とみ、竹内田鶴子、小西麗子、池永美恵子、山本和、井田春子、島田美代子、高森美代子、朝熊ひさ子、田辺紀子、石川英、阿部幸子、池山幸、赤塚千代子、竹尾彰、奥田敦子、服部登喜子、村井貞子、藤田あけ子、倉田みか、桑山アツ子、継松茂子、丸岡英子、近藤志津子、別所恒子、稲橋美代、渡辺麗
昭和十八年卒 山本登志子、浅山てる、丸林操、田中れい、尾鍋道子、高田かほ子、岸田紀、赤塚たみ、青木明子、伊藤貞子、大島ほづ子、岡田美喜子、荻原みえ

昭和十九年卒 水谷謙、増田賢、別所嘉郎、大谷弘道、田中俊雄、中澤圭一、曾野功、村田快夫、中尾学、鈴木正孝、駒田慶一
昭和二十年卒 小野政幸、赤塚俊一、別所敬、梅本和男、斎藤五郎、松中昭一、松山信直、梅本順良
昭和二十一年入 奥井春房、中村宏、松村勝行、浅尾 戌、別所三彦、奥村利男
【三重校の部】
大正十二年卒 米本登志
大正十五年卒 佐々木かよ
昭和三年卒 天野清子、伊達愛子

人との出会い

中村 宗 矩 (昭和30年卒)



人は生まれた時から人との出会いが始まり、人それぞれの人生を送るようになる。残念ながらその出会いが、その人の人生を左右する場合もその時点ではお互いが知らぬままの場合も多い。しかし、少年期の人との出会いは格別なものがある。

私の中学時代は一年生五十八人、男子のみの二クラスしかなかった。津高校へ入学すると、まずは男女共学であることにまじい、恥ず

かかったが、もつともびつくりしたのは同学年が五百人で十クラスもあつた事である。さらに三年間毎年クラス換えがあり、何か新鮮さを覚えたものであつた。

今にして思えば多くの人との対話ができる環境があり、さらに多くの個性豊かな先生方との出会いも楽しかった思い出である。

その後今日まで、多くの人との出会いがあつたが、今考えると私は大変人に恵まれた人生を歩んできたと思ふ。

また、同級生と何年ぶりかであつた人との出会いはないだろうか。本来は再会と言つた方がいいが、私が17年ぶりに津に戻つたときに、それぞれの環境は変わつていたが、同級生が十数人私の為に集

(雑感) 暮し

海野 武 司 (昭和36年卒)



親父が生前よく口ずさんでいた「赤い花なら曼珠沙華オランダ屋敷に雨が降る……」流行歌の題名は知らない。

今、その曼珠沙華が堤防や水田の畦に群生し、まさに赤い絨毯を敷き詰めたように咲き、周囲の緑とのコントラストも良く、見る人に美しい上に力強いものを感じさせている。早朝の散歩の度に目にし満ちている。

私はこの花、曼珠沙華が好きである。何故か、それは生命の根源

をその赤色に感じるからである。また、他の一面は曼珠沙華を除く幾つかの草木が近年自然環境の変化の影響を受けて、季節はずれの花を咲かせ、実を付ける中で、この花は秋の彼岸になると必ず真紅の姿を見せるからである。毎年同じ時期に花を咲かせるその変わらない自然のリズムに惹かれる。

最近私は、本来の人の暮しとしての花に見る思いがする。一年一年同じようなサイクルの生活、暮らしに求める安堵は、曼珠沙華のように同じサイクルで生きる姿そのものなのではないか。変化の乏しい生活に飽き足りなくて変化を求め、刺激を感じようとする動きが、遅く生きていく実感を得ているが如く、感じ見られていくが、それは動的に生きていくといつ

先生も別に気にされることなく過ごしてきた。それは、先生と生徒の間に必ずしも同等でなく、教える人と教わる人の別が基本的に保たれた上で、それぞれの信頼関係ができていたからではないだろうか。

今の青少年にも、人間としての信頼関係を確立するべきを教える必要があると思ふ。

私は今、歯科医療に従事しているが、医療もサービス業の中の一つとなり、患者さんとの対話を十分にする。すなわちインフォームドコンセントを十分に行つてゆかなければならない。人との対話は易しそうで難しい問題だが、それでも人間は毎日、人と出会うわけばならない。あまり肩を張らずに、今日も人と出会うように努力している。

最後に母校のますますの発展を祈念している。(三重県歯科医師会会長)

どの虚像であつても本質ではないよ

うな気がする。毎年の生活の変化のない時の流れそのものの平凡な生活の連続が暮らしてはいないかと思ひ始めている。変化のないゆくりとした時の流れの生活を求めるために逆に変化を付け速い時の流れを創り出し、これを好みそしてそこに身を置いていくのではな

いかと思つ時がある。風の音を耳で確かめ、小川の流れ、水の光を目に写し、木漏れ日の小道をふらりと散策する人々の心は平穩無事

で心の安らぐ生活のリズムを本能的に希求しているように見える。暮らしについての考え方も様々である。この様な見方はどうだろうか。人間の本性に求められる指向と動向があるとするならば、この二つがバランス良く

子、奥田清子、奥野テル、奥山美子、笠井福子、笠間洋子、笠間芳子、柏倉幸子、片岡 朝、木平鈴子、菊地喜久子、小林美智子、多賀浩子、滝谷生子、玉本裕子、滝野ツネ子、寺尾朝子、東海朝子、中田清子、中道君子、永井信子、長尾ゆき子、丹羽しげ子、西岡悦子、西野咲子、並川貞子、中井寿子、花谷 知、浜田芳子、早川宣子、林 千鶴、日比 妙、福島あや、増田視三子、松田あさる、宮川芳子、森田いさ、山本純子、山本りゅう子、渡辺弥生、吉田たつ子、田野嘉代、村田きぬ、松尾妙子、松浦美津子、白澤照子、木富聡子、山下郁子、宮崎 翠

昭和三十九年卒 重松幸子、山本久枝、中村久仁子、杉野登子、別所茅津、奥山美登子、宮崎しげ、岸野伊佐子、大谷文江、樋口悦子、小島八重子

昭和三十九年卒 加藤れい子、村田順子、加納日出子、谷口きよ子、岡田 孝、谷川久子、本庄ヒサ子、奈良華子、光野和子、足田清子、梅本とも、小西喜久子、野中泰子、清水延子、田端和子、後藤つむ子、青木敏子、藤田為久、平松多喜子、野田雅子、今井登美子、西口幸子、徳井きしえ、前田好子、日置好子、岡林禮子

昭和二十年卒 長谷川順子、小澤とし子、近藤成子、門 美登子、平山伊津子、三宅あけ子、谷口みよ子、谷 和子、鈴木照子、鈴木和子、吉田ゆきえ、藤波美智子、阿部定子、富田由紀子、中井照子、岩田悠紀子、丹羽はま

昭和二十二年卒 渡辺美智子、石井 和、古市ゆた、山村三重子、金丸ツネ子、山納千枝子、久住喜久子、伊藤文子、村木巳代子、泉幸、若井久子、谷 房子、森畑美代、山田雅子、青木武子、山中喜美子、長井隆子、加藤悦子、黒田幸子、梅田勢子、川嶋圭子、久山照子、森下千瑞、高本禮子、安藤梅子、中世古順子

昭和二十三年卒 村田和子、立花幸子、川北綾子、森 良子、山本静子、川北美智子、松本茂登子、飯田シゲ子、岩田録子、小田千鶴子、亀山みね子、草野恒子、黒宮

信子、野呂ひろ、黒宮澄子、倉田幸子、藤岡よし子、岡 恭子、小田原鳥子、水野一子

昭和二十四年卒 増田よし、奥村貞子、尾崎久代、嶋本房子、河村美代子、岸江孝子、千木良清子、萩原あさ子、日沖美子、稲垣洋子、昭和二十一年入 金 佳子、草深玲子

昭和二十四年卒 松田隆利、上月昭吾、渡辺応子、桑原章郎、米田道子、中川順二、岡田晶子、駒田静子、佐久間かず子、松浦 健

昭和二十五年卒 林 幸夫、杉浦茂夫、秋田和彦、岡田 一、山田学、増本恵子、佐野昭次、小野倫郎、塚澤 正、藤井幸子、藤園達 廣田富美子、武野喜夫

昭和二十六年卒 西岡寅之助、樋渡清浩、小川ミツ子、加藤和木、宇留田 肇、岡田久司、古藤りつ、岩田築子、山下美津子、杉浦豊生、山本富美子、澤路保子、田畑一生、奥山紀二、稲垣清利、西尾宏子、中野明子、川原田実、野田 実、澤田裕子、前山実次、若林恭子、大田治男、加藤弘子、村嶋容子、杉山茂樹、澤村三子、加藤幸子、酒井 綱、館 暉子、辻敬太郎、荒木貞夫、鈴木一生、桜井 寛

鈴木正子、山本由美子、古藤 實、平松朝子、山田郁子、加藤正治、川本幸子、小野不二雄、大西正治、野崎 愛、加藤栄三、岡 道代、月輪正道、小林澄子、飯田久子、小畑佳弘、宮田太郎、辻 通隆、真川節子、鈴木五六、三藤幸子、橋爪洋之、西川静男、柘植敏孝、柳瀬宏子

昭和二十七年卒 川喜田貞久、服部昌子、小栗美子、村林清子、山本芳子、藤波 護、前川 剛、池田民也、金森和子、安藤陽子、森田武、川本綾子、川本富昭、田中美音子、近藤 皓、西澤憲嗣、大原美智子、中村和巳、白井幹生、森 清孝、西川三郎、高井昭子、落合ひで子、長合子、川島拓爾、世古口弘子、筒井忠勝、西村清美、前川和子

昭和二十八年卒 川喜田淑、宮崎三三男、喜田治男、藤井伸枝、小黒佳子、我藤秀子、阿比子義孝、澤路啓子、川戸池鶴子、中島豊博、伊藤芳樹、土屋道生、金川勢津子、国原佳子、野島達雄、杉浦静子、山口みよ子、玉置美知子、岡 弘子、堀 啓二、橋本紀子、栗田うた、山本義行、扇本正孝、宇河英崇、宇河ミヨ子、中井弘子、宮崎鈴枝、菊山やす子、内山則夫、原英子、山下せつ、田中昌子、高橋米子、飯田道嗣

昭和二十九年卒 内田順己、中尾弘一、吉川昭一、足立 謙、瀬古幸郎、別所治子、西川敦久、宇野京子、岡 康、野田義顕、橋本三重子、稲垣 毅、米沢克子、堀 昌夫、橋本佳子、加藤 武、瀬戸雅子、藤園淳子、柴 昭子、鳥羽登、青世登建、市川武彦、梅田克彦、永野仁施、藤園輝巳、古市恒夫、大西おさる、草川俊一、前川汎子、家合和子、金森正一、横木健介、深谷広成、堀 元昭、家合和俊

昭和三十年卒 香木美奈子、山村敏之、柴山耕自、前川 昇、渡辺晴子、大川親正、加藤重延、村田義子、小柳 治、杉山和津子、久保清子、坂口真智子、高井和子、落合健一、近藤和子、北川浩子、子原英和、国府美枝、山口誠郎、山井孝泰、橋本威彦、谷中剛嗣、草深セツ子、日川澄子、市川了一、大森容史、吉田明典、青木宏達、河村久子、岩田 昭、速水道子、佐藤佳子、尾崎順子、田中良太郎、昭和三十一年卒 中森悦子、山本将憲、金澤成吾、後藤忠士、秋田順子、鎌田重忠、福森智子、萩下真子、岩下みさ子、長谷川正彦、中山雅生、山下光子、藤田謙司、濱口幸雄、牧美津子、青山高士、菊地照子、藤岡美也子、小島竹安、安達久子、田端千春、前山真知子、上原敏子、杉田人子、高森妙子、池村重光、高野素子、高橋伸知、草深碩也、永合幸江、森千津子、吉川ツネ子、前川正明、加藤敏夫、川合照子、米川あさ子、安藤とし子、白木嘉子、安福秀一、比良多道晃、横山幸子、千草啓一、小野きみ子、長田順子、西井章子、柘植幸子、坂森五百枝

昭和三十三年卒 吉川絹代、水野孝恒、谷口文夫、前田憲志、小川美紗代、加藤 栄、杉田公春、橋本八重子、川喜田敦、野田千孝子、高橋武史、川口道子、小柳宏充、倉田 護、山田浩人、堀川 清、堀川晴美、山口幸子、村田 潤、澤田祥子、澤田龍男、増田 裕、加藤彰久、諸岡茂樹、梅本貞治、下村尚義、田岡裕子、伊藤克三、田川敏夫、松橋文子、池田悦子、市川 朗、杉谷次雄、市川恭子、水谷千春、寺田美知子、二宮君子、松岡哲也、山岡 豊、山本宏子、昭和三十三年卒 杉浦登史子、岩田博子、黒川昌洋、佐藤信一、谷正紀、石原英雄、水越昭子、山本国郎、大道等徹也、佐野元子、前山 邦、川合興行、増井敏一、石崎欽也、野田祐造、辻岡 守、宮崎敏三、芝田寛二、村田和彦、岡本孝三、荒井 健、川上基和、菊地富士郎、水谷忠文、原田和子、西藤由美、梅澤輝子、北折比佐子、藤原日出子、野田芳子、松本守弘

昭和三十四年卒 丹羽邦夫、森尾邦江、若林富美子、田中 好、田中紀子、波多野 進、井田 明、竹本章子、中山ナヨリ、大野孝子、土屋佳子、中島明子、新谷芳子、中島あけ美、高橋紀子、鈴木昌代、藤田 愛、川畑光世、神宮正信、松浦洋子、井土由利、松井典子、太田比佐子、福森瑞子、松岡裕子、太田相子、秋田正継、黒石 昇、若林 健、中津忠夫、末宮彰人、東出礼子、寺島信宣、松永嘉子、角谷祥子、菊岡映子、菊岡和明、田村 崇、町井三重子、榊田文八、丸山紀久子、北村忠克、神戶新子、松田正久、奥村典子、植月知子、中根 章、工藤正英、伊藤年代、奥田榮子

昭和三十五年卒 長谷川洋、太田克子、笠井英嗣、松岡 満、美河宏一、加藤哲也、宇田川秀雄、落合淳一、細川清之、林 朋子、坂部勝美、堀さなえ、高田茂穂、中辻高明、笠井光男、米倉 宏、米倉信子、佐々木和男、馬場佐世子、川北栄子、鈴木雅子、黒石正子、若松美久子、山中喜久子、中川憲子、糸木順子、針谷斐子、佐々木明子

昭和三十六年卒 山本三千代、

津高進路事情

進路指導主任 石橋 佳代子

「改革」開示「小卒等」等
 教育界への新風は厳しく、本校進路指導部もその直撃を受けています。この激流の中で百二十周年を迎える本校は、再び歴史と伝統を持った進路指導の位置付けを明確にしていきたいと思います。またそれが、今盛んに唱えられている、特色ある学校作りの意に添ったものであることを痛感します。

先に行なった生徒の志望校調査がそれを証明しています。国公立大学志向は定着、さらに難関大学志向は著しく強まっています。今年三月の卒業生では半数以上が国公立大への合格を決めています。下記の図表より読み取っていただけると思いますが、十クラス宛名ですから、全国的に見ても決して見劣りするものではありません。数値には現れていませんが医学部医学生徒も12名を含んでいます。大学及び、学部学科の増設により大学進学は易しいと見られる一方、難関大学と呼ばれる大学は今まで以上に難しくなっています。この状況下で本校生徒が易きに流れる、自らの希望を叶えるべく強い意志を持ち学ぶ姿勢を失わずにいることは、やはり先輩諸氏の築かれた伝統の重みと思われまます。

平成十四年には完全週休二日制が実施され、授業時間数は当然減となります。また総合学習、情報学科の設置、教育過程の改革による小中学習の内容の削減等々高等教育にも大きな変動をもたらしています。しかし大学側、特に難関といわれる国立大)では学力の低下の低下は許さない姿勢を崩していません。中学までの学力の削減分を高校三年間で補うことは無理なものです。しかし「これを生徒の「学ぶ力と教師の充実と授業」で克服している学校は、具外視察を通して多くの進路指導者(先生)が通じています。本校の使命は「先達の方々にこの厳しい現状の理解を切に望んでおります。」

昨年度より取り組んでいる「自分探し」事始めの事業も、自ら考え学ぶ生徒の育成の一環と考えています。実際本校へ入学してくる生徒の多数は優秀な学力を持っています。この状況下で本校生徒が易きに流れる、自らの希望を叶えるべく強い意志を持ち学ぶ姿勢を失わずにいることは、やはり先輩諸氏の築かれた伝統の重みと思われまます。

平成十四年には完全週休二日制が実施され、授業時間数は当然減となります。また総合学習、情報学科の設置、教育過程の改革による小中学習の内容の削減等々高等教育にも大きな変動をもたらしています。しかし大学側、特に難関といわれる国立大)では学力の低下の低下は許さない姿勢を崩していません。中学までの学力の削減分を高校三年間で補うことは無理なものです。しかし「これを生徒の「学ぶ力と教師の充実と授業」で克服している学校は、具外視察を通して多くの進路指導者(先生)が通じています。本校の使命は「先達の方々にこの厳しい現状の理解を切に望んでおります。」

昨年度より取り組んでいる「自分探し」事始めの事業も、自ら考え学ぶ生徒の育成の一環と考えています。実際本校へ入学してくる生徒の多数は優秀な学力を持っています。この状況下で本校生徒が易きに流れる、自らの希望を叶えるべく強い意志を持ち学ぶ姿勢を失わずにいることは、やはり先輩諸氏の築かれた伝統の重みと思われまます。

(大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大
H12年卒	226	40	669	22
H11年卒	220	41	740	64
H10年卒	187	32	748	59

(主要大学合格者数)

	北海道	東北	筑波	東水	京大	一橋	金沢	信州	名古屋	名古屋	三重大	京大	大阪府	神奈川	奈良	広島	愛知	上野	早稲田	青山学院	中央	東京理	明治	法政	立教	愛知学	南山	名大	皇学	龍谷	京都	近畿	立命	関西	三重大								
H12年卒	2	2	1	0	4	0	8	8	22	10	6	60	3	12	11	2	8	4	2	14	28	4	9	11	9	9	15	10	4	11	5	18	32	39	17	16	10	11	33	90	51	18	10
H11年卒	6	1	8	2	0	1	7	10	22	7	5	78	3	10	8	5	7	1	2	14	17	4	10	12	13	14	17	15	5	13	25	11	30	31	26	16	18	24	40	92	57	27	12
H10年卒	6	5	4	1	1	0	5	10	19	5	5	53	2	10	10	4	6	3	5	6	13	2	5	6	8	9	8	2	2	25	24	23	31	28	16	29	13	29	55	76	64	10	14

40794分の1であることの誇り

伊藤 真弓 (昭和54年卒)

54年卒の私達には、津高百二十周年記念同窓会実行委員会をさせていただくというプレッシャーがなかったと言えはウソになるが、自分自身でできる限りのことを一生懸命やっただけでいい、メンバーは各々充実した気分を味わったのではないだろうか。

卒業以来一度も会ったことがなかった級友が集まり、二次会・三次会で盛り上がり、夜も更けてからそれぞれが帰路に着いたが、別れ際に「来年もよろしく」「毎年やりたい」という声があがった。また、後日何人かの友人から「ありがとう」「本当に楽しかった」という手紙やメールが舞い込んだ。感動的冷めやらぬ親友からは「やっ

ば、津高ってええ学校やとてへんく思っただわ」と電話もあった。今年の同窓会のテーマは「出逢い40794分の1」。私は「この度実行委員会をさせていただき、改めて自分が40794分の1であることをとても幸せに、誇りに思った。今回の同窓会のお世話役をしていただいた42年卒の先



- 原 宣一、谷田美子、池田彰公、中戸義徳、大井与生、黒沢英夫、杉野 彰、下津英昭、飯沼智彰、津坂洋子、金児文夫、伊藤隆文、吉川 弘、佐野孝子、安田成子、北川 映、前川公子、久岡克美、国富富子、徳田順胤、鈴木正二郎、荒川 猛、飯田泰之、飯田俊司、板野 勝、伊藤守夫、稲葉邦成、岩崎克彦、池川誠一、内保忠勝、大市大吉、奥井明男、葛山 丕、木下昭一、紀平明良、小塚 勲、後藤晃一、坂本浩一、杉井正美、高山光昭、田辺隆義、中尾修也、新山宏一、西池昭彦、林口朋一、堀井正一、村木正二、渡辺 鴻、昭和四十七年卒 林 昭久、近澤順道、美宅正忠、刀根幸子、水野晴子、駒田文彦、佐々木淑子、三浦義秀、斎藤隆彦、藤田万智子、森島正宏、永井玲子、岩脇 勝、白井純一、竹林武一、西本健郎、野田佳實、中澤光昭、田中正孝、吉田俊彦、別所俊彦、宇佐美真男、楠 清子、栗田則一、赤塚高之、昭和三十八年卒 宇高忠昭、前田照子、分部紘一、安田富己生、鳥井 節子、飯田 一郎、印田恭子、坪井 武、岡本晴弘、下津恵美子、根本孝子、吉野紀子、森岡和子、本田博彦、岡八智子、稲富節子、上原順子、保地勝彦、朝熊 清、伊藤紀昌、岡林常泰、奥山茂樹、加藤廣海、河合哲男、川辺新蔵、園分晴夫、近藤 功、阪倉征途、坂崎勉也、杉村弘子、鈴木勝郎、鈴木秀昭、佃 道子、坪井清美、中嶋昭雄、長谷川順一、前山鎮男、村田八紘、山松健一、吉沢嘉浩、保地規子、瀬古淳二、中条政紀、昭和三十九年卒 丸橋美優喜、加藤勝基、小林博子、芝山英治、後藤輝人、飯田美津子、三浦たけ子、大西弘子、三谷美智子、松島翠樹、仲 次男、高田裕美、服部那於子、高橋耕二、中尾正己、朝日奈 晰、村田孟男、川村正人、谷口義信、和田年弥
- 昭和四十年卒 昭和四十年卒 一同 隆 艶子、山脇英一、石川博一、川喜田 久、山田則男、飛岡浩治、山田弥生、井崎孝、若林英郎
- 昭和四十一年卒 昭和四十一年卒 一同、鈴木重俊、倉田藤圓、田村正衛、稲畑耕一郎、中村芳夫、井上純子、田中友子、大西光子、内藤茂三、瓜生通憲、加藤律子、蛭川龍順、真備美徳、天野 一、伊藤千代子、田中友子、長谷川まつ子、和田ひで子
- 昭和四十二年卒 昭和四十二年卒 一同、尾藤 彰、山本悦男、眞弓光文、松本充司、川口幸子、山本ルミ、新 光子、安藤俊次、安藤はる子、渡部 満、山崎竹夫、佐藤 博、小菅 隆、松田好臣、野田洋一、伊藤和代、福永 昭、表高秋、表 典子、宇佐美むつ子、大塚真美
- 昭和四十三年卒 岡本公秀、松尾みち子、西川 満、中島典代、加納美津子、西田律夫、青木幸雄、鶴田孝雄、辻 親廣、吉岡泰三、脇坂義則、村島隆文、前田 豊、田村知子、駒田修一、細川啓子、山路俊文、中村豊久、稲垣美津子、田中美恵子、松岡雅子、真弓輝仁、昭和四十四年卒 式内徹郎、本堂多喜子、高橋恵理子、北川 博、青山雅樹、戸田喜之、前山章子、小林 薫、塩谷泰人、細野篤子、林美三子、鈴木千恵子、小西美紀子、鈴木 優、村林義人、山川尚美、中山正隆、向井久規
- 昭和四十五年卒 河内 隆、鈴江直子、桃澤智恵子、伊藤庄吉、山本有子、山本剛士、田島精洋、佐々木とし子、棚橋尉行、酒井啓子、戸沢修美、鈴木 宏、福井義浩、伊藤喜久男、安井英二、山本いづ代、渡辺基行、村島正幸、向井珠代、木村正士、桃澤智恵子、梁井とし子、工藤雅俊、松ヶ谷光廣、庄山正昭、岡村伸博、高畑茂生、小西章夫
- 昭和四十六年卒 安藤孔一、内田吉雄、西村信夫、紀平正道、天野一之、山本尚哉、和氣正史、大久保哲郎、米澤雅之、内山文道、平松登志子、加藤千明、藤田彰男、安田健治朗、安田順子、大橋弘幸、前川祥一
- 昭和四十七年卒 小澤康孝、小柴富久子、楠木伸子、稲守和之、平井幹男、久世表士、橋本幸司、久保さつき、長谷川登、岸野隆夫、田中久勝、岩名利憲、田中隆之、田中祐子、関美江子、田中真人
- 昭和四十八年卒 小柴真治、小川兵衛、小林俊明、渡部穂子、高畑和子、奥田郁夫、後藤淳子、井村眞規子、山下幸彦、中村裕則、山川裕美、藤澤清志、大井 牧、赤塚隆彦、西塔 誠、森本まゆみ、小山久美子、前田真治、前田真理子、野田くみ子、中村芳子、多喜美奈子、平井裕美子、澤山健一、藤枝聖子、野口節子、増田伸子、津谷典子、中尾浩一、山本恵子、阿部幸夫、阿部恒子、谷口勝昭、寺田 孝
- 昭和四十九年卒 安保正治、安保玲子、石井好子、中西秀伸、小河健彦、正木郁夫、別所 弘、服部久子、榎本敏子、小菅 弘、平田はつ子、武田俊一、生駒正昭、岡村能里子
- 昭和五十年卒 杉本扶美代、工藤美佐子、後藤初枝、伊藤 誠、石倉 笑、岡野 清、野崎和子、牛尾加代子、赤塚信子
- 昭和五十一年卒 城口正人、恒矢景子、海住悦司、久世真理、寺尾正紀、平野和義、宮崎充功、出岡 誠、坂本頼洋、大倉隆久、稲垣 司、後藤 泉、小林 裕、三藤治喜
- 昭和五十二年卒 昭和五十二年卒 一同、辻岡哲治、佐藤元治、竹内正、穀田直久、近藤直哉、六田嘉郎、若林紀子、倉田紀子、伊藤淳二、藤高 聡、杉野 一、古谷富子、西城昭二、飯田幸司、尾関 健一
- 昭和五十三年卒 昭和五十三年卒 一同、打田 健、滝川 純、小林政子、村田哲也、信田信行、楠井隆司、坪井朋子、柏木睦子、大井由美子、伊藤知里、小出眞人
- 昭和五十四年卒 昭和五十四年卒 一同、森 聡子、奈良郁子、加藤卓、草深 浩、東 泰行、橋康之、中北芳久、篠木俊枝、西澤博、川合康之
- 昭和五十五年卒 谷村一彦、大森雅彦、山本由美恵、田中 寛、服部洋子、眞崎俊明
- 昭和五十六年卒 猪股雅之、作野郁子、石居紀子、後藤 清、辻村恭江、川合雅子、島 健
- 昭和五十七年卒 奥田文彦、拜田 稔、広瀬真利子
- 昭和五十八年卒 前塚俊英、濱崎隆子、野村嘉恵子、武谷理佐、橋爪正樹、伊藤公則、大野拓哉、堀川幸寛、安田 誠、内田三佐子、柘植規宏
- 昭和五十九年卒 山路英和、東口大介、東川直樹、神山正男、坂森 恵美
- 昭和六十年卒 細野弘美、小川英樹、早麻真司、長田晃代、大森祐子、扇本みどり
- 昭和六十一年卒 新谷継市、山田元次、野明 淳
- 昭和六十二年卒 吉川 武、田山 準子、長崎 透、伊藤美香、玉置知子、林有起子、箕浦高子
- 昭和六十三年卒 岡田晃佳、福島重幸、安田健司
- 平成元年卒 永瀬陽子、宮本紀樹
- 平成二年卒 飯田今日子、片山香里
- 平成三年卒 真弓健志
- 平成四年卒 松元まどか、渡辺雅芳、藤田 耕
- 平成五年卒 和田直子、田中喜代子、本田貴章、松田 章
- 平成六年卒 川本 泰
- 平成七年卒 伊藤大輔、酒井 究
- 平成八年卒 左近 雄、辻本美里
- 平成九年卒 後藤幹伸、福井哲兵、針谷菜生子
- 平成十年卒 高松峰人、川合陽子、野田悠介
- 平成十一年卒 谷 真宏、山口 真、田中孝幸
- 平成十二年卒 岡村崇博

目標額にむかって引き続き募金活動を継続

募金目標額三千万円にはまだまだという状況であります。各年度に於かれましては、まだ募金をお願いいたします。

お知らせ

平成十三年度 同窓パーティー

日時 平成十三年八月四日(土) 午後三時より

場所 津市センターパレスホール 津都ホテル

担当学年幹事 昭和43年卒(代表 澤 忠知) 昭和55年卒(代表 大森 雅彦)

各地で同窓会開催

東京同窓会

津高創立百二十周年記念CDから、なつかしい校歌や応援歌が流れる中、五月二十七日(土)十二時、東海大学校友会館にて、鈴木雅子校長先生、本部役員の方々、恩師の先生方をお迎えし、百四十

ピーチは、例年になく礼儀正しく正統派だったので、感心している先輩方も多かったように見受けました。

最後は津中、津高女、津高の校歌斉唱。次回を約束して皆さん帰途に就かれました。

次回は、東海大学校友会館にて、平成十三年(二〇〇一年)五月二十六日(土)開催予定です。

津高東京同窓会ホームページのアドレスは <http://www.26.ac.jp/~tsukokkyo/> ですね。

九州同窓会

第十一回津高九州同窓会が平成十二年六月十一日(日)福岡市で開催されました。

総会では役員改選に伴い

名古屋同窓会

九月九日(土)、厳しい残暑の中、平成十二年度名古屋同窓会が名古屋東急ホテルにおいて開催されました。

水谷幸代(54年卒)

大坂同窓会

第34回津高大阪同窓会は十一月五日に開催、長い間、馴染んで

十三年度同窓パーティー案内

澤 忠知(昭和43年卒)

平成十三年度同窓パーティーは西暦二〇〇一年八月に「津市センターパレスホール・津都ホテル」で団塊の世代最後の昭和四十三年卒と五十五年卒が担当して開催致します。

お迎えする事になりますが、ご出席いただいた方全てにご満足いただけるような楽しいパーティーにしたいと考えています。

また来年は食べ物にもひと工夫したいと思っておりますので多数の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

永く会長を務めて戴いた鈴木匠氏(昭和16年卒)が顧問、村田正文氏(昭和22年卒)・熊本大学名誉教授が新会長に、副会長には稲垣洋子氏(昭和24年卒)が選任されました。

本日より岡村会長・鈴木校長・鈴木教諭のご出席を賜りました。

今年、昭和30年卒が企画の担当を任せつかり、津高三〇(サンマル)会事務局の号令一発、二〇名が即座に集結、無事大役を果たすことが出来ました。

「ジャーナリストから見た40年」と題しての講演は、目に見えた事実の第一報から始まって、真実の報道に至る迄の苦勞や、時には政治権力(?)による美話等を具体的に事例を挙げての講話を考えさせられる事しきりでした。

最後は校歌斉唱を行い来年の再開を約束して散会しました。

前川 昇(昭和30年卒)

「茶摘み」せじ日かな 特別顧問天野清子(昭和3年卒) 堀 博英(昭和46年卒)

総会ではまず岡村会長、鈴木山校長よりそれぞれ挨拶と津高近況報告をいただき、続いて役員改選にて欠員となっていた副会長に櫻井合子様(S32年卒)を選出いたしました。

第34回同窓会は、津高百二十周年記念事業の開催されました。

「シャナリストから見た40年」と題しての講演は、目に見えた事実の第一報から始まって、真実の報道に至る迄の苦勞や、時には政治権力(?)による美話等を具体的に事例を挙げての講話を考えさせられる事しきりでした。

津中昭和十四年卒業生は、「陳川55会」とよんでいる。私たちの学年は太平洋戦争に、最も大きな犠牲を払った学年である。

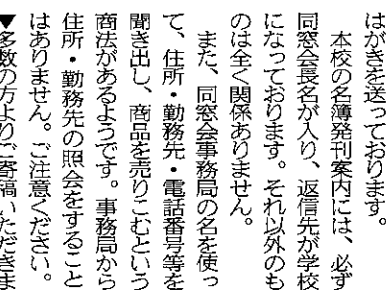
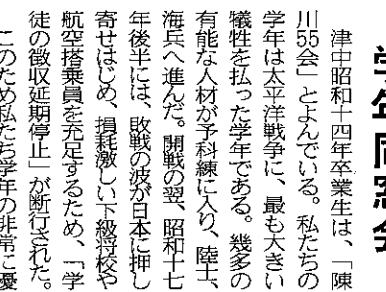
津中昭和十四年卒業生は、「陳川55会」とよんでいる。私たちの学年は太平洋戦争に、最も大きな犠牲を払った学年である。

学年同窓会

津中昭和十四年卒業生は、「陳川55会」とよんでいる。私たちの学年は太平洋戦争に、最も大きな犠牲を払った学年である。

本校の各専科別案内には、必ず同窓会長名が入り、返信先が学校になっております。

本校の各専科別案内には、必ず同窓会長名が入り、返信先が学校になっております。



三重校部会より 同窓会へ寄附 この毎、三重校部会から百三十三万七千九百九十九円を同窓会に寄附していただきました。ありがとうございました。

昭和41年卒業生 ホームページ開設 平成11年津高同窓会の担当学年になったのを契機に「津高41年同窓会事務局」が生まれました。

週刊朝日に 本校の特集記事 週刊朝日の記事の中にシリーズ新世紀「日本の名門校ベスト100」に本校が「創立百二十周年、益々躍進する」津高高等学校特集として、平成十三年一月中旬に掲載されることになりました。

事務局より 本校同窓会と全く関係のない業者が「三重県立津高高等学校同窓会」として調査カードと申込みのハガキを送っております。

事務局より 本校同窓会と全く関係のない業者が「三重県立津高高等学校同窓会」として調査カードと申込みのハガキを送っております。

事務局より 本校同窓会と全く関係のない業者が「三重県立津高高等学校同窓会」として調査カードと申込みのハガキを送っております。

事務局より 本校同窓会と全く関係のない業者が「三重県立津高高等学校同窓会」として調査カードと申込みのハガキを送っております。

事務局より 本校同窓会と全く関係のない業者が「三重県立津高高等学校同窓会」として調査カードと申込みのハガキを送っております。

事務局より 本校同窓会と全く関係のない業者が「三重県立津高高等学校同窓会」として調査カードと申込みのハガキを送っております。